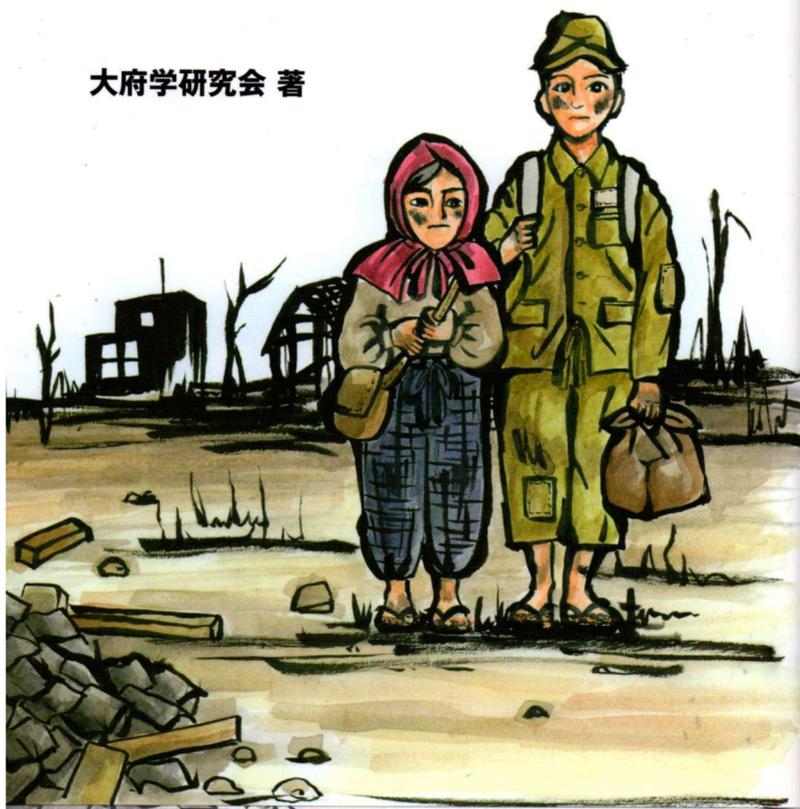


**大府の戦争体験を語り継ぐ**  
**戦時下の大府で生きた**  
**あの日 あの時**

大府学研究会 著



## 大府駅界限

昭和十年前後の日本は、工業技術を中心にして歴史的にも大きな隆盛期を迎えていた。国産の技術による丹那トンネルが開通し、東海道線の超特急「つばめ」が東京と大阪間を八時間でするようになった。東京や大阪にはパリやロンドン並みに地下鉄が普及した。

満州鉄道の「あじあ号」は全車両冷房付き特急であった。庶民レベルでは、遂に日本も一流の近代国家になったという自負が生まれていた。

和男は、後に太平洋戦争が始まった翌年に、中学校への進学を断念したが、待望の三菱重工業(株)名古屋航空機製作所に養成工として入社した。

通勤は早朝の一番列車に乗って毎朝出掛けていた。一番列車は大府駅を五時〇六分に発車するが、停車時間が三分位もあり余裕があった。

戦時下の大府駅では、出征軍人の壮行がよく行われていたので、しばしばその光景に出会うことがあった。

出征軍人は、日の丸の小旗の波と歓呼の万歳、そして軍歌の嵐に送られて、多分別れる暇も後事(こうじ)を整理する間も無いように思われ、あわただしく戦場へ向って行った。

そして家族から見送る人達は、列車が遠く姿を消すまで、声を枯らして励ましを送り、武運長久を祈り続けていた。

しかし、和男は、勇躍征途についた出征軍人が、遺族の胸に抱かれた白木の箱となって、

故郷の大府駅に無言に帰還して来る光景も、たびたび目にすることもあった。

中には和男と数年と違わない若者もいたようだった。青春の喜びを投げ捨てて、勝利を信じてながらも、虚しく戦場の露と消え去った我が子の無念さを思えば、家族にとつていたたまれなく、すすり泣く遺族の姿を見ては、その都度、和男は駅頭から合掌し、ただ黙とうするのみであった。

(戦争体験を語る次ぐ有志の会)

あなたが征った大府駅 声なく帰った大府駅

多数の英霊安かれ 故郷を思う遺志継いで

戦なき世を築きます 永久の平和を誓います

## 1. 国鉄大府駅

明治の近代化の波は大府にも及び、一八八六(明治十九)年に武豊線が開通し、翌明治二十年は大府駅が営業を開始した。さらに一八八九(明治二十二年)には東海道本線が開通し、東海道本線と武豊線の分岐点として大府駅は交通の要衝となり、将来の大府の発展に繋がる素地をもたらした。その後、大府村は一九一五(大正四)年には町制を施行し、人口は八、四一二人であった。

当時の国鉄大府駅は、線路の東側に立地した木造平屋建てで、入口は南向きでオープンになっていた。待合室は風通しがよく、中には細長い木製のベンチが四台背中合わせに置かれていた。待合室の東側と西側窓際は、端から端まで平板で腰掛けになっていた。しかし、真

冬には寒さがまともに身に凍みた。

入口の正面の右側が切符売場で、行先の駅名を言うと、算盤で計算して切符をくれたが、乗車券は今とは違い、ボール紙くらい厚紙の立派な切符であった。切符売場の左側全部が鉄道荷物の集配所になっていて、今の宅急便などの制度が無かったので、小型から大型の荷物まで配送してくれた。

待合室の中央西側に改札口があつて、木製の頑丈な柱で凹凸の二連に組立てられて、見送る人はそこから列車の人に手を振ることが出来た。列車の窓は上下に自由に開けることが出来たし、停車時間も一分と三分と、今と比べると相当に長かった。

和男の家は大府駅まで歩いて二〜三分程度で、列車が大府駅に向かつて、和男の家の脇にある高山神社を通り過ぎる線路の響きと共に、急いで走って行けば十分に乗ることが出来た。



(大府駅) ↓

列車の乗車口はドア式でその外側の取っ手を開いて自由に中へ入ったが、いつもデッキにまで乗客が溢れていた。

駅の北東側敷地内には、しつかりした建築の便所があり、線路に沿って北西方向に少し行くくと木造平屋建ての鉄道官舎が沢山並んでいた。

東海道線の主要駅で武豊線の接続駅として、太平洋戦争の始まる迄は、特急、急行に次ぐ準急列車も停車していた。

ホームでは、駅弁の立売りもあつた。「おおぶ」と駅名を告げる駅職員の声に交じって「お茶にお弁当!」という売り子の声を聞くこともできた。当時、駅弁の立売りは、名古屋く豊橋間では、大府駅と岡崎駅のみであつた。

当然、大府駅前には駅弁を作る業者「弁当屋」がいて、森永煉乳が卵の黄味と氷を使つてアイスクリームを作つた。そして駅前の弁当屋がカップ入りで販売していた。これは日本での初めての試みであり、冷たいだけでなく、とろけるような甘さと新鮮な牛乳の香りが大変な好評を博していた。

線路沿いの住民は、汽車の走行音によって、上りの「つばめ」だ、下りの「富士」だといつて、時計を見なくても、時間を知ることが出来た。

駅の正面の角地に、ごく小さなタクシーの詰所があつた。タクシーは町の規模の割には台数が多かつたようだ。これは大字森岡には国立愛知療養所があり、歩くには距離があり、ど

うしても遠方からの家族や見舞いの方は、タクシーに頼らざるを得なかったのであった。

その頃の武豊線は貧弱で、機関車の煙突は長く車体も細くて、力も弱かったようだ。機関車は一生懸命馬力を出すのが、力不足のようで、石ヶ瀬川鉄橋の手前の急勾配が登れないことが度々あった。そんな時には、また大府駅よりもっと遠くまでバックして勢いを付けて、もう一度出直したりした。二度挑戦しても駄目なときは車両を何両か切り離していた。

貨車の重量があるときや、車両が多いときは、機関車が二両連結で走るとか、前後に機関車を仕立て走ることもあった。

しかし、満州鉄道に勤務していた父親と帰国してきた友達の方が、和男に、「武豊線の狭軌のレールを初めて見た時は、何処かの工事現場のトロッコ用のレールかと思った。だが、そのレールの上を、懸命に走るいたいけな機関車の姿が見たら感動した」と、言ったことが印象に残っていた。



(大府駅前通り) ↓

## 2. 軍用列車

一九三七(昭和十二年)年七月の盧溝橋事件を発端として、当時は支那(中華民国)との間で戦闘中であつた。ただし、両国とも宣戦布告を行わなかつたため事変と称してゐた。

国鉄東海道線は、軍隊が鉄道を使つて満州や中国の大陸前線へ、兵士や兵器、物資の輸送のため運行する軍用列車が目立つようになってきた。

その軍用列車の運行日程や時刻は、大府駅前もつて知らされてゐた。大府駅沿いでは、和男の家の脇にある高山神社の土手辺りが、子ども達が歓呼の万歳を送るには最も適してゐた。そこで線路の脇に日の丸の小旗を持つて、列車の来るのを待ち受けてゐた。やがて、軍用列車が近づいて来ると、子ども達が一斉に、

「兵隊さん、バンザイバンザイ」



と、日の丸を千切れるように降つて、声を枯らして励ましを送っていた。

兵士たちも窓から身を乗り出して、それに手を振つて応えて、お菓子の入った紙袋を投げた。日本軍が優勢を続けていた戦闘でもあり、戦地へ行くという悲壮感がみじんも感じられず、和男たちには、何故か楽しい思い出として、脳裏に焼き付いていた。

### 3. 大根列車

戦前に大府の名が全国に知られた一つに、大府特産の農産物である大根を抜きにしては語れなかった。

大府の農家では秋の大根の出荷時期になると、町内一面にあつた大根畑から、五本縛りの青首大根を束ねて満載した大八車や牛車が、町内の四方八方から大府駅へ延々と続く光景が8  
繰り返されていた。

和男は、これらの大根が、大府駅南にある日本通運大根集荷場まで、殆ど毎日のように次々と運ばれて来るのを目の当たりにしていた。

集荷場所の前の引込線には、いつも貨車が何両か停まつていて、荷が一定の量に達すると、関西市場へ毎日貨車で運ばれて、「大根列車」と呼ばれるようになっていた。

このため大府駅では大根専用ホームを急ぎよ増設して対応していたほどであった。

この集荷場所辺りは大きな倉庫が幾つも並んでいて、和男ら子ども達のかくれんぼ遊びの、絶好の場所ともなっていた。

積み上げられた大根は、貨車に積み替える時には、人から人へ順番に手渡しで行っていた。

時々手から滑って地面に落とす事があり、そんな時に大概に大根が折れていた。

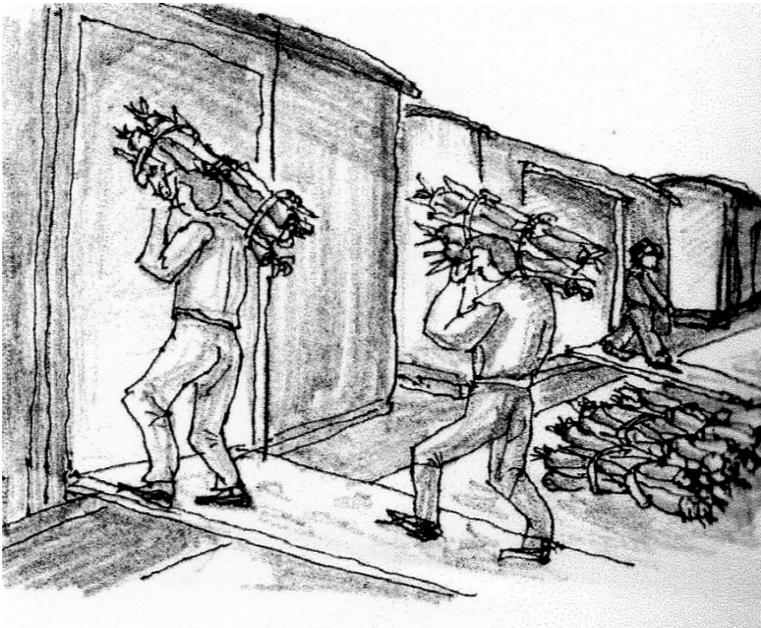
ある日、和男は、かくれんぼ遊びをしながらこれを見ていたら、作業員から、「坊や、欲しいなら大きいのは駄目だが、小さいのは持っけていても良いよ」と、声をかけてくれた。

それからの和男は、小さいバケツを持って遊びに行くようになった。

生の大根を千切りにした「千切り大根」を、寒風に曝（さら）して干し上げたものを「大根切り干し」と呼んでいた。これも大府名産になっていた。

和男は、この「大根切り干し」の作業をよく手伝っていた。大根畑の空き地に、材木で棚を組んでおいて、その上に、竹で編んだ簾（すだれ）を乗せた。

簾の上に千切り大根を薄くばらまいて、寒風に曝（さら）して干し上げて、時々手



返しをして、平均に干し上がるようにするのがコツであった。

和男は、適当に乾燥すると大きな布製の袋に入れて、すぐ近くの集荷業者に買って貰っていた。大根切り干しを持って行くと貫目計りで、その時の相場で買ってくれた。

いつも店頭には、大根切り干しが山と積まれていた。そこを通ると大根切り干しの匂いが鼻につき、一種独自の香りを漂わせ晩秋に懐かしい趣を添えていた。この大府の大根は、特に戦時中の主食品の不足を補う野菜として大変貴重なものでもあった。

#### 4. 愛知療養所と大府荘

大府の名が全国に知られたもう一つに、緑の木立に囲まれた森岡の丘陵地は、亡国病とまじわられた肺結核の転地療養に最適だということで、日支事変後の一九三八（昭和十三年）に国立傷痍軍人愛知療養所が、翌十四年に県立大府荘が、続いて十五年に県立教員保養所が開設された。

昭和初期では、肺結核は死病の一つで、不治の病といわれ怖れられていた。

肺結核の治療は、大気、安静、栄養療法による自然治癒を主にしており、療養所へ入院したら、何年もいや十年以上退院出来ない患者が多かった。

当時は肺結核の治療薬であるストレプトマイシンやパスなどの杭性物質のない時代でしたので、薬石の効なく死亡する患者が毎日のようにあった。

死亡する患者の内、身寄りのないご遺体は、ある古老が担当していた。ご遺体を入れた棺桶をリヤカーに乗せて自転車に連結し、古老の愛犬も紐を付けてリヤカーを引っ張り、森

岡の地から大字横根にあった火葬場まで、黙々と運び入れては焼却して吊っていた。

和男はこの古老が、人の毛嫌いする仕事を真面目にこなしている行為を、時々目撃していた。子どもながらも、この古老の行為に何か崇高な人物像を見る思いがしていた。

大府町は曹洞宗寺院が多いため土葬が主体であったが、人口増加に伴って火葬希望者も増加した。一九三七（昭和十二）年より、従来の横根の火葬場に大府町営火葬場が新設された。

しかしながら療養所では、将来を悲観して自ら命を絶つ患者もあった。

大府駅を出発した東海道線の列車は、和男の自宅のすぐ南にある八幡社付近から左方向に大きくカーブを描くようにして走行していた。

かつて八幡社は松籟が琴を奏でる音の如く聞こえた浄地でもあったが、東海道線の拡幅により境内が縮小され、小高い森となって神社の面影を残していた。

その付近は、機関手からすれば、線路の急カーブと境内の樹木に遮られて、非常に見通しが悪く、魔の難所といわれていた。そのため、病に悲観した療養所の結核患者が、飛び込み自殺を図る悲劇の場所ともなっていた。

そこで事故が起こると、機関手は列車を停車させ、汽笛でもって大府駅に知らせた。

「ボツ、ボツ　ボー　ボツ、ボツ　ボー　ボツ、ボツ　ボー」

と、大府駅から数人の駅員が跳んで来た。知らせを受けて警察、医者も駆けつけて来た。そうして全員揃うと、集めたばらばらにな

(傷痍軍人愛知療養所跡の碑) ↓

った死体を繋ぎ並べて、身長や特徴を調べて書類に記入し、薦(こも)を被せて、戸板に載せて駅まで運び安置した。年に数回はあった。

## 5. 名駅高架区間の盛土

現在の名古屋駅は、一九三七(昭和十二年)に改築されたが、この工事で金山駅から名古屋駅周辺に至る高架区間の盛り土として、現在の桃山公園の西側で採掘した土砂が大量に運ばれていった。

土砂の搬出は昭和四から十一年までの七年間の長きにわたり、土採り場へは大府駅の上り線から側線を一本敷設し、外国製のドラクラインというキャタピラ付重機二両で土砂を採掘し、三十両の車両(無蓋車)が一組となつて、大府と名古屋間を一日三往復していた。



和男は、よく工事現場を見に行ったが、

「名古屋駅は大府の桃山の分身だ。桃山の盛り土があったから名古屋駅が出来た」と、子ども同士では、よく自慢し合っていた。

採掘跡地の桃山公園西側（現桃山町二丁目）が、殆ど垂直に近い崖（がけ）状になって続いているのは、採掘跡地の名残であった。

また、後に戦争末期に食糧増産のため、第一国民学校（現大府小学校）の校舎裏側の土地を、児童たちがさつま芋畑に開墾していたが、この土地を耕すと鉄道の枕木や線路をつなぐ金具などが沢山出てきたのは、採掘跡地であることを物語っていた。

## 6. 大府飛行場専用側線

太平洋戦争中の一九四四（昭和十九）年十月に、大府駅から大府飛行場まで鉄道が敷設され、軍用機部品の輸送が図られていた。この三菱専用側線延長は三、三三七mで、国鉄武豊線大府駅構内西側から分岐して鞍流瀬川を横断して田畑を縫いながら西進し、途中、現在の豊田自動織機長草工場付近にあるウド交差点辺りから飛行場への進入が急勾配の傾斜地となっていた。

そのため、スイッチバック方式（ジグザク・Z字型に線路を敷設）を採用して、丘陵の麓で反転して組立工場東口まで、蒸気機関車が逆向きの体勢で押し上げるようにして登り詰めを行った。

(三菱専用側線の経路) ↓

和男は、後に三菱名古屋航空機の養成工として、ウド交差点東側にあつた大府飛行場の専属農場「成田牧場」で健民修練で農作業をしていたが、この三菱専用側線を走る列車をしばしば眺めることが出来た。

因みに、戦後、この三菱専用側線の線路跡は、一般に「ウドの廃線跡」と呼ばれているが、市街化が著しくなり、その跡は極めて分かりにくいのが、ウド交差点辺りから中電大府変電所辺りまでは直線の生活道路として残り、大府市循環バス「ウド住宅」のバス停も設置されている箇所もあり、往時を偲ぶことも出来た。

また、「ウド」の地名とは、丘陵から流れ落ちる水によって麓の土が流されて深く窪んだ所を意味した。

### 7. 三菱一色の大府駅前

三菱名古屋航空機大江工場は、大々的な分散工場疎開を实行了た。

一九四五(昭和二十)年六月に陸軍機部門の四式重爆撃機「飛



龍」関係が、大府へ全面的に移行してきた。

大府駅周辺を中枢管理部門として、大府駅周辺の主要建物が收容された。

全部を一か所に收容可能な大規模な建造物などは皆無で、大府町役場や公会堂、民家等にばらばらに分散して利用した。

①所長室は、東海道線踏切付近にあった平野医院の別棟の建家が当てられた。一九二七(昭和二年)に竣工した当時の大府でも異彩を放った二棟から成る初の二階建て洋式建築物であった。

②幹部室と会議室は平野医院に近接した町内きつての豪邸の堤邸内においた。

③保健係は堤邸に程近い牧場主邸の一面に、一九四五(昭和二十)年五月に三菱病院用地15として買収した。

④庶務課は大府町役場二階、設備課は加古組の邸宅、訓育係は尼寺の地藏庵など始め、人事課、運輸課、調査課・業務課、労務課・企画課、食堂、大府寮、材料課、工作部長室などが建並んでいた。

しかし、事務所不足は避けられず自然的に

廃業に追い込まれた商店などが積極的に事務所に転用されて軒を連ねて、いつしか商店街も事務所通りと化して、大府駅前にはにわか三菱名航大府町一色となった感があった。

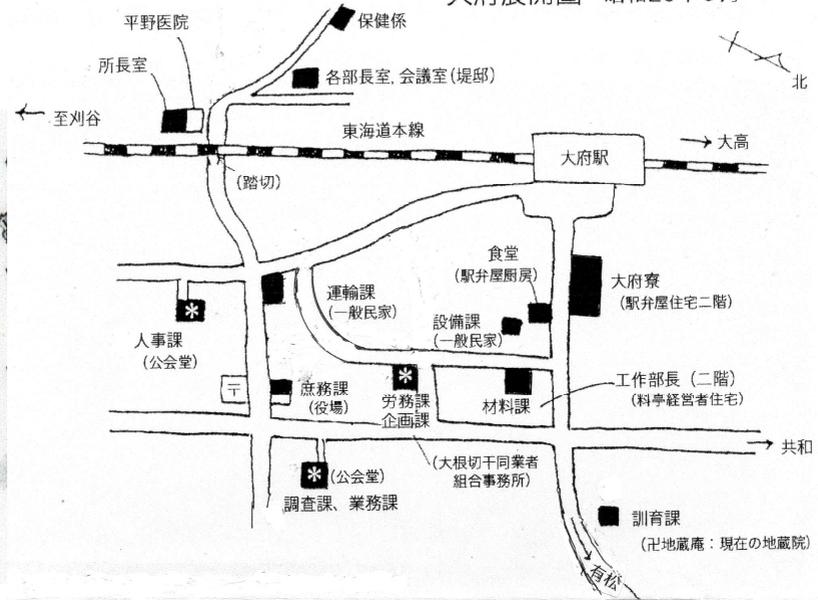
その頃になると、大府駅からの通勤や通学は、不規則になって来た。

列車の数は少なくなり、乗客は多かったので大変であった。乗客の多くは窓より出入りしていたが、小柄な背の低い女性たちでは、窓からは入れなかった。乗降口のドアも開かないので、昇降デッキの棒に掴まり、手がしびれる思いで、ぶら下がって通学していたこともあった。

便局)

(大府 郵

大府展開圖 昭和20年6月



## 東海道本線の悲劇

終戦の前日の一九四五（昭和二十）年八月十四日に、東海道本線刈谷〜大府間で列車が艦載機に銃撃され立往生し、乗客が石ヶ瀬川の堤防の松林に逃げ込んだ。

当時、大府町役場に奉職していた十九歳の渡辺房枝は、鮮血がしたり落ちる負傷者をトラックで刈谷の古居病院へ搬送するなど、懸命に治療や連絡などに当たっていた。

渡辺房枝より入手した資料を基に、列車襲撃の状況を纏めてみた。

……稲垣信夫は、一九四四(昭和十九)年四月一日、国鉄名古屋鉄道管理局の教習所に入り、そこで三か月間の教育を受け、機関助手になった。機関助手の生活は、朝一番の勤務もあれば、夕方に乗って泊まり、翌日に、名古屋へ向かって帰って来るということもあった。

稲沢機関区が貨物専用で、名古屋機関区は客車専用であった。稲垣は機関助手としての乗務にも慣れて、東海道本線・関西線・武豊線に乗務するようになった。

終戦の前日の一九四五(昭和二十)年八月十四日は、天気が良く、気温も三十度余もある暑い日であった。この日の朝七時に名古屋駅発第七一一列車(上り浜松行)で出発し、十時18分に浜松駅で折り返しの浜松駅発第七一〇列車(下り名古屋行き)に乗務していた。

刈谷駅で、助役さんから

「空襲警報が入っているから、気を付けて行ってくれ」と言われた。

「よし、分かった」

と、言って発車させた。今のJR逢妻駅付近で一旦停車して様子を見た後に、徐行しながら逢妻川辺りに来た時、左手から三機のP51が飛来し襲撃体勢に入っていた。

稲垣は、終戦の時は、今で言うと高校一年生の年齢に当たる十五歳であった。十五歳の若者が、何百もの人の命を預かる機関手の仕事をしていたのであった。

第七一〇列車は、前方の二両には陸軍の兵隊を二百名ほど乗せ、後方の十両の客車には一般客が乗車していた。襲撃されたら乗客を避難させる以外に方法はなかった。列車を急停車させた所は、境川の西の今の産業廃棄物処理場の裏手辺りであった。

稲垣は運転席から降りて、炭水車の下へ逃げ込もうとした。三機のP51の高度は一〇〇m位で、操縦士の顔がはっきり見えた。

この時、稲垣は負傷した。足を打ち抜いた弾が線路の小石を粉碎し、その破片が後ろから左肩付近に食い込んだものであった。

しばらくして、知多運輸のトラックが来て、稲垣ら負傷者は刈谷の古居医院（現刈谷豊田総合病院）に運ばれた。犠牲者は、兵士二名、一般乗客二名で、一人の兵士は頭を撃たれ、もう一人の胸を撃ち抜かれたと聞いていた。

稲垣は、古居医院で傷口を丹念に消毒してもらった。銃創の入り口は直径五cmくらい、出た方で八cm位あった。

当時は、痛み止めの薬も麻酔もなしで、傷口から消毒用のガーゼを奥の奥まで突っ込んで治療した。貫通銃創だから良かったと思っていた。背中や肘（ひじ）の奥に入った石の破片は、一〜二年経ってから浮いて来て、古居医院で摘出してもらった。九死に一生を得て、現在、こうして健康でいられることに感謝している。